



Title	青年期の環境移行における対話的ビブリオセラピー体験の意味づけ
Author(s)	山下, 朋美
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/92922
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (山下 朋美)

論文題名 青年期の環境移行における対話的ビブリオセラピー体験の意味づけ

論文内容の要旨

本研究においては、参加者の語りから、環境移行にある青年期による対話的ビブリオセラピー体験の意味づけについて仮説的モデルを生成し、今後の対話的ビブリオセラピー研究及び実践の土台として、対話的ビブリオセラピーが援助資源としてどのように役立つのかを理解する一つの枠組みを提示することを目的とした。

第1章 ビブリオセラピーの総説

ビブリオセラピーについて概説し、対話的ビブリオセラピーの特徴や利点と欠点をまとめ、今後の研究における課題と展望を明らかにすることを目的とした。先行研究をレビューし、ビブリオセラピーを「文章作品の活用によって、成長や健康の促進、問題対処、感情の変化など、クライアントの治癒的な変化を促す試み」と定義した。下位分類である読書セラピーと対話的ビブリオセラピーについて概念を整理した。読書セラピーは、問題解決を目的に文章作品を処方する。対話的ビブリオセラピーは、文章作品を用いて、ファシリテーターと参加者との間に治癒的な相互交流（対話）をもたらす。触媒としての文章作品や物語の機能を活用し、成長に焦点化し、心理的幸福を高めるコミュニティであることが特徴である。他の心理療法と比較して、問題解決を目的とせず、多面的な成長に焦点を当てること、触媒としての文章作品が、自己表現の参考となることから、参加の心理的障壁が低いという利点と、専門家の不足や参加者の要因、文章作品の有限性により、対話的ビブリオセラピーの適用に限界があるという欠点を示した。実証研究の少なさや、限定的な研究手法及び対象者の選定が対話的ビブリオセラピーについての先行研究の課題であり、定義の明確化や、対象者の拡大、質的研究の実施を今後の展望として示した。

第2章 本研究における着目点

本研究における介入方法、対象者、研究手法についてそれぞれ着目点を明らかにすることを目的とした。介入法としては発展性があり、参加の心理的障壁が低い対話的ビブリオセラピーに着目した。対話的ビブリオセラピーの利点をいかしうる、環境移行にある青年期を対象者とした。環境移行とは、新たな環境に直面することにより、自分と環境との新しい調和を模索する必要がある時期のことである。本研究の対象者は青年期にあり、多面的な課題を抱え、媒介的コミュニティ（新しい環境へ移行する際の一時的な居場所）が必要である。対話的ビブリオセラピーの心理的障壁の低さが生かせること、実践に還元しやすいことから、環境移行のうち、高等教育機関及び社会への移行を対象とした。対話的ビブリオセラピーが本研究の対象者に対して初めて実践されることから、可能性を広く拾い上げるために質的探索研究を採用し、参加者の語りから体験の意味づけに着目することを示した。

第3章 対話的ビブリオセラピーの実践例

対話的ビブリオセラピーにおける体験の前提について読者が共通認識を持つために、実際のプランノート及びプロセスノートをもとに、対話的ビブリオセラピーの計画から実践、実践の振り返りについて具体的に提示した。

第4章 研究1：外国の高等教育機関への環境移行における対話的ビブリオセラピー体験の意味づけを構成する要素の探索的検討

環境の変動が大きい、本国から外国の高等教育機関への移行にある留学生に、対話的ビブリオセラピーを実施し、留学生による対話的ビブリオセラピー体験の意味づけとして、各ワークにおける体験をどのように捉え、セッション全体の体験をどのように自身の中に位置付け、体験主体がどのように変容したかについて明らかにすることを目的とした。留学生4名に対話的ビブリオセラピーを実施し、半構造化面接を行った。自由度が高く、様々な可能性を拾えるテーマ分析を選択した。結果、4つのメインテーマ、12のテーマが抽出された。留学生は気軽に対話的ビブリオセラピーに参加し、セッションの各ワークにおいて、治療的な文章作品による感情体験、創造的執筆によって、自己表現を楽しみ、文章作品を土台とした対話により他者との違いを面白がる体験の意味づけを行った。ストレスフルな日常と比較して、自由に表現できる、ほどよい非日常な場、環境移行を助ける場としてセッションを位置づけ、留學生活に有用な変化として、ストレスフルな日常への気づきや柔軟性の獲得という変容を体験した。このように、仮説的モデルを生成する体験の意味づけを構成する要素としての仮説的知見を示した。課題とし

て言語的障壁や対象者の限定性、研究手法上、概念間の関連を示せなかったことについて論じた。

第5章 研究2 大学から社会への移行における対話的ビブリオセラピーの体験過程～体験に意味づけを構成する要素間の関連

うまく乗り越える必要がある、学校から社会への移行（STWT）にある、日本の大学院生を対象に対話的ビブリオセラピーを実施し、体験の意味づけについて半構造化面接を行った。体験の意味づけを構成する要素間の関連として、対話的ビブリオセラピーの体験過程についての仮説を生成するため、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。結果、31個の概念、5個のサブカテゴリー、9個のカテゴリーが生成された。現象全体の変化を意味づける中心的解釈として、3つの内と外（非現実世界と現実世界、個別の内的世界vs他者と共有された世界、セッションの場vs日常生活の世界）との往還を繰り返しながら多面的な気づきが進展する過程が明らかになった。体験過程として、文章作品を読むことや、創造的執筆による参加者自身の内部で知覚する体験は、楽しむ余裕や、普遍性の感覚と関連しており、対話やグループポエムなど他者と関わる体験は、新しい視点の取得や違いの受容、他者への共感と関連していた。以上、仮説的モデルを構成する要素間の関連についての仮説的知見を明らかにした。対話的ビブリオセラピーの体験と参加者の変容についての結びつきが十分に表現できなかったことが課題であった。

第6章 就労移行支援事業所から社会への移行における対話的ビブリオセラピー体験の意味づけ～体験と参加者の変容との結びつき

就職活動における心身の負担がある、就労移行支援事業所から社会への移行における、対話的ビブリオセラピーの体験と参加者の変容の結びつきを、事例を通して明らかにすることを目的とした。7名の就労移行支援施設の利用者に対話的ビブリオセラピーを実施し、半構造化面接を行った。佐藤（2008）を参考に、対話的ビブリオセラピーの体験と参加者の変容について概念化し、再文脈化の試みとして概念同士の結びつきについて、4つの事例において示した。文章作品による内的な体験による自己理解、対話による自己受容が就職活動に役立つこと、複合的な対話的ビブリオセラピーの体験がストレス軽減に役立つこと、文章作品を媒介とした対話によって就労継続に活用しうる違いの受容が促進されることを示した。仮説的モデルを構成する要素間の関連のうち、対話的ビブリオセラピーの各ワーク及び全体的な体験の位置づけと、参加者の変容の結びつきについて仮説的知見を示した。

第7章 本研究で得られた知見のまとめ

青年期の環境移行と、各研究の対象者における対話的ビブリオセラピー体験の意味づけについての仮説的モデルを提示することと、非臨床の参加者、日本の参加者における体験の意味づけの特徴を提示することを目的とした。3つの研究に共通した対話的ビブリオセラピーの体験の意味づけから、3つの媒体としての文章作品は、自分の内的世界及び、創造的執筆と、他者との共同作業に影響した。内的世界と他者に関する体験の両方が、場の体感に影響を及ぼし、日常を離れた場、自由に表現を行う場となり、環境移行を手助けする居場所と意味づけられた。環境移行に必要な変容として、文章作品を媒体とした対話により違いの受容が促進され、複合的要素により、気分のポジティブな変容が促進されるという仮説的モデルが生成された。留学生にとっては、対話的ビブリオセラピーが環境移行を直接的にサポートする媒介的コミュニティとして体験されるという仮説的モデルが生成され、新たな環境への適応を支えるという点で役立つことが示唆された。大学院生にとっては現実と想像をつなぐ体験であるという仮説的モデルが生成され、多面的な自分についての気づきを促すという点で役立った。就労移行支援施設の利用者にとって対話的ビブリオセラピーは、安心し、自己受容できる場であるという仮説的モデルが生成され、心身の負荷を和らげ、社会的なスキルを向上させるという点において役立った。非臨床群にとっては、気軽に参加ができる体験であり、日本において対話的ビブリオセラピーは自分についての気づきを促す体験であると意味づけられた。

第8章 本研究の意義と今後の展望

本研究の意義と限界、今後の展望を明らかにした。学術的意義としては青年期の環境移行にある人々における、対話的ビブリオセラピー体験の意味づけについて、今後の研究で検証可能な仮説的モデルを提示できた。実践的意義としては、青年期の環境移行における一時的なコミュニティとして対話的ビブリオセラピーが活用できることが示唆された。具体的なセッションデザインを示し、今後、対話的ビブリオセラピーを実践及び研究する際の礎となる知見を提供した。本研究の限界として数量データを扱わなかったため対話的ビブリオセラピーの効果に言及することはできなかった。研究者とファシリテーターが同一人物であったことで、インタビューにて話せなかったことがある可能性に触れた。今後、量的データの活用や、様々な視点からの仮説的モデルの検証、ファシリテーターによる体験の違いなどを明らかにすることを展望として論じた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (山 下 朋 美)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	野村 晴夫
	副 査	教授	大谷 順子
	副 査	准教授	佐々木 淳

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、心理支援法である集団式による読書療法の一つ、対話的ビブリオセラピーが、青年期の参加者にどのように体験されているかという意味づけの解明を目指している。そのために、先行研究に基づく理論的研究に加えて、著者自身による対話的ビブリオセラピー実践に関する面接結果に基づく実証的研究が行われた。対話的ビブリオセラピーは、日本において、その実践も研究も寡少である。そのため、実践に基づく実証的研究は、このセラピーの適用対象を、日本の、とりわけ環境移行を経験している青年期に拡大することも目指している。

第1部では、先行研究に基づく理論的研究として、セルフヘルプブックの利用や、個別形式なども含めた多様な読書療法を概観した上で、対話的ビブリオセラピーの特徴、および、長所と短所を探求している。その結果、対話的ビブリオセラピーは、他種の読書療法の問題解決的な目的に比べて成長促進的な目的を掲げるもののほか、ファシリテーターや参加者が相互に交流することや、文章作品を媒介しつつも参加者による筆記や討論等の自己表現を促進することが特徴として抽出された。また、長所としては、グループで文章作品を読み合い、話し合うというレクリエーション的な性格による心理的障壁の低さなどが挙げられた一方、短所としては、参加者に適した文章作品を選定する難しさなどが挙げられた。

第2部では、3種の環境移行を経験する青年期を対象に、対話的ビブリオセラピー体験に関する面接を行い、その体験の意味づけが探索された。研究1では、留学という移行を経験する青年期を対象とし、その面接で得た語りにテーマ分析を実施し、他の参加者との異質性や自由な自己表現を楽しむ体験としての意味づけが見出された。研究2では、大学から社会への移行を経験する大学院生を対象とし、その面接で得た語りに基づき、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによって、体験の構成要素間の関連を積極的に考慮した分析が目指された。その結果、非現実世界と現実世界、個別の内的世界と他者と共有された世界、セッションの場と日常生活を往還しながら、新たな視点の取得や他者への共感などに至る過程が明らかとなった。研究3では、就労移行支援施設から社会への移行を経験する青年期を対象とし、その面接で得た語りを概念化するとともに、事例における各概念の布置の描出が試みられた。その結果、対話的ビブリオセラピーが、就職を目前に控えた参加者に、自己理解や自己受容、ストレス軽減などをもたらす具体的様相が明らかとなった。

第3部では、以上の理論的、実証的研究の成果を総括し、それが有する学術的、社会的意義、および、将来的な課題が論じられている。第2部の3種の環境移行に際した対話的ビブリオセラピー体験の意味づけには、自由な自己表現、非日常性、居場所感が共通していた。そして、こうした意味づけが、体験後の変容をもたらすプロセスが仮説的に提起された。

本論文は、展開可能性が期待されつつも国内での実践や研究の報告が乏しい対話的ビブリオセラピーに着目し、豊富な実践例を通じて、参加者自身による体験の意味づけを明らかにしており、極めて独自性が高い。そして、参加者が体験した自己表現や居場所感は、同セラピーに固有の意義のみならず、読書療法や集団療法、青年期発達支援等、より広範な領域における意義をも示している。

よって、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。